

虹

niji

七瀬 佑衣

nanase yui



よく、聴いていた歌と。

よく、笑った季節。

いつかは、どこかで聞こえていた声。

どこかで、きっといた記憶。

1日の終わりに見た景色には。

いつも夕焼けがあった。

どこかで、きっと1日の終わりを感じていたっけ。

どこか、微笑んでいた記憶。

あたしはいつも、笑っていた。

秋の空には、いつも古ぼけた本と。
温かい湯気の立ちのぼるブラウンカラーの飲み物がそこにあった。

目の前の景色は、あたしを克明に映し出して。
暖かな日差しは、やがて寒さを増していくあの日をまた繰り返すのを恐れて。

いつの間にか、あたしの目の前では白い冷たさも忘れて。
ただ、あの人は静かに笑っていた。

いつも、そばにいたような気がする。
笑顔は、あたしにとっての特効薬で。

いつかなんて、いつもある存在のひとつに過ぎず。
いつも、想いはただあの人のためにあったんだ。

カサカサと、地面で紅葉が音を立てる。
足音は、冬とは異なる暖かな日々の連なりに似ていた。

冬には、いつも白さを強めて。
外ではいつも空気を感じさせないくらい、暖かな日差しを求めている。

いつか。
あたしは、遠い記憶を想う。

いつか。
あの人を求めるくらいに、冬は鮮明さを忘れて。

あの方はきっと笑っただろう。
終わった季節を想うくらいなら、涙ですべてを覆うほどに。
あたしのすべてを、あの方は奪っていったんだ。

秋はいつか、どこかで想うだろうか。
あたしは、いつも何かで感じていた。

どこかにあったのは、いつか忘れたかった記憶だけで。
何かではきっと忘れずにいた想い。
あの方は、いつか笑顔を忘れていた。
あたしを奪ったのは、きっとその日を忘れたかった記憶の渦になりえたから。

空には、いつも夕焼けがあった。
あの方の影が、今日もひとつ消えていった。

どこかで見ていた1日の記憶。
今、あたしはこの狭い部屋の中で糸を辿るように眺めていた。

最後の1行を、どんな気持ちで読み終えたのだろうか。
いつも、あたしの記憶には最初の1行だけが鮮明に残っていた。

1つの物語には、いろんな人間模様が刻まれていたりした。
そのどれもが、あたしにとってはひとつの人生論にも似ていて。
どこかでは、何かで教えをもらっていた。

何かでは、きっと迷っている自分を見つめ直していた。
窓の外を眺めたのは、いつも迷わない自分を自画自賛するかのよう。
その日だけは自分を忘れてしまった忘却という言葉が口にしてもいいのなら。
あたしには、現実感のない、幻覚症状の現われた夢の続きのように感じられた。

言葉は、何のためにあるのだろう。
いつも記憶にあったのは、自分の言葉ではなかった。
誰かが言った記憶なんて、ひどく曖昧で。
あの人の言った言葉には、季節を通り越した現実の灯火があった。

いつ、この部屋でこれを想うのか。
それを、どこで知ったことがあるのだろう。
寒さなんて、きっとどこかで忘れていた記憶になり。
そこにあるのは、暖かさなんて思い出すこともないくらいに。
人を信じられなかった季節を捉えて。
あの人の言った言葉と共に、自分の存在をいつも感じていたりした。

『最後なんて、どこにもないよ』
真摯な眼差しは、本当にあたしを捉えていたんだろうか。
笑顔は、いつの間にかどこにも存在しなかった。

空に夕焼けを見た日。
影を落としながら、静かに笑った。
『もうすぐ、冬がくるね』

ただ、言葉は何も感じずにいられた。
1冊の本を読み終えた時に、記憶としてあった言葉。
重なったのは、何かがそこで終わったように感じたから。
それを口にしたら、涙なんてどこにも存在しないような気がした。

痛みは、どこかに消えていくんだと信じた日に。
あの人は涙を流した。
信じたのは、きっとそばにいられたから。
そばにいる記憶は、どこかでずっと続くように思っていた。

日付が変わる瞬間。
真夜中の1日の終わりに、記憶は遠く空を思いながら。
いつもあの人を感じた幸せを願った頃を思い出して。
あたしは、遠い記憶の中で永遠を想った。

最後に、誰かが笑った。
あたしは、その人を知っていた。
誰かは、どこかにいた記憶の中で。
いつも、あたしに訴えかけていた。

幸せは、どこにあったんだろう。

あたしは、きっと幸せを感じながら。
人を愛していた。
人を信じていた。
人を想うことに、すべての永遠があると信じていた。

あの人は、最後に泣いた。
最後は、きつとなかった。

あたしに与えてくれた言葉には。

いつも、あの人の喜びが隠れていたように思う。

最後につないだ手は、誰よりも暖かった。

白い季節は、永遠の中にあったから。

49日目の朝には、どこかできっとあの笑顔を見たような気がした。

僕は、いつか想っただろう。

永遠はあるんだと願ったあの頃に。

戻れるその時がくるまで。

永遠という言葉に命を変えながら。

いつもキミを想うだろう、と。

どこかで、キミは笑っていたね。

いつか、冷めた笑顔の裏で。

僕だけを、ただ見つめていた強い眼差しだとか。

誰かを想う気持ちは永遠だ、と。

誰がそれを証明してくれる？

僕は、きっとどこかでキミに伝えたかった。

いつか、永遠は僕たちの中に存在するんだ、と。

あの日にかかっていたのは、普段なら見れない珍しい虹だったね。

虹色なんてよく言っていたけど。

あの日だけは、僕たちの未来を見たような気がしていた。

笑顔は、何のためにあるんだろう。

僕は、ずっと笑っていたように思う。

キミは、何かを思い出すかのように、いつも窓の外を眺めていたね。

何か、見えるの？

何か、考えることはあるの？

キミの言葉は、いつも1冊の本から語られた何かに似ていた。

夕焼けは、どこかにあった。

存在はキミを失うことなく、ただ空を見つめるばかりの1日の終わりだった。

キミの記憶は、どこにつながっている？

どこかに僕はあったのかな。

涙はきっと、誰かのためにあったんだと、僕は信じていた。

キミのために、日々は巡った。

1日の終わり。

僕の流した涙は、キミの目にどう映ただろうか。

あの日に、僕が感じたものは。

キミの存在をすべてに置き換えたいぐらいに。

想ったすべてを、キミと捉えていたかった。

いつか、遠い記憶はなかった。

いつか、永遠は続くものだと思っていた。

夕焼けは、どの1日にも勝るぐらいに、その日を鮮明に残していった。

最後の日は、永遠だと誓いながら。

優しさを伴いながら、僕の手の中でキミは眠っていったね。

笑顔は、永遠に僕を見た記憶。

キミがいた、命の証明。

いつか、僕と生きた永遠の未来。

また、どこかで虹を見るんだろうか。

夕焼けよりも近い、
二人で見た、あの日の虹の蜃気楼のように。

～僕たちの中の、白い季節へ～